仏様のおはなし新シリーズ第９８集「是山和上（これやまわじょう）」

一月より歎異抄を読む会を始めました。少しずつですが、親鸞聖人の言葉を味わってまいりたいと思っています。歎異抄（たんにしょう）の第一条に「弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし（抜粋）」という言葉がございます。阿弥陀様のお救いは、老いも若いも、善人も悪人も一切問わない。ただ信心だけが大切なのだ、ということです。

このように聞くと「あの老人も若い人も、あの善人も悪人も」と私たちは仏さまの救いの目当てを外側に探してしまいがちです。私の恩師は「善人・悪人を外側に探す必要はないよ。この文章はね、良い時の私も悪い時の私も、私がどのような状況であっても決して見捨てない仏様だ、と、そう味わうんだ」と教えてくださいました。

むかし是山恵覚（これやまえかく）和上（１８５７～１９３１）という学徳兼備（がくとくけんび）の素晴らしい僧侶がおられました（「和上」とは浄土真宗の素晴らしい僧侶の尊称です）。しかし是山和上も晩年、認知症になられ、毎日お勤めしていたお正信偈すら「帰命無量寿如来（きみょうむりょうじゅにょらい）、…？」と二句目が出なくなられたそうです。

介護疲れもあったのでしょうか、奥さまがご本人にこぼされたそうです。

「昔はあんなに素晴らしい和上さんだったのに、いまではお正信偈（しょうしんげ）も忘れてしもうて…」

それを聞いた是山和上は仰ったそうです。

「わしが忘れても、仏さまが忘れてくださらんけえ、大丈夫じゃのう。」

私たちは、安らぎとは確かなものをつかむことだと考えてしまいます。また私の心に強い信念が生まれることだと考えがちです。

是山和上の一言は、私が確かになるのではなく、不確かな私にこそ届いている仏様のお慈悲があるのだと教えてくださっています。不確かであることと、安らぎが相反しないのが浄土真宗の世界です。

不安なら不安なまま、悲しみは悲しみとしてあるままに安心していける世界がある。不安や悲しみがあればこそ、いよいよ私を目当てとした救いがあると、そう味わっていくのが浄土真宗の法の喜びです。今この瞬間、私を包む慈悲の光がある。そのことを計らいなく聞き受けること、これを「他力の信心」と申します。

正覚寺　賞雅曜哲